

國學院大學學術情報リポジトリ

妖怪「牛鬼」の現代的表象の成立とその変遷

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學大学院文学研究科 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): 妖怪, 牛鬼, 口承文芸, 大衆文化, 水木しげる キーワード (En): 作成者: 加藤, 嵩人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001645

妖怪「牛鬼」の現代的表象の成立とその変遷

The Establishment and Transition of the modern representation of the Japanese Yokai “Ushioni”

加藤 嵩人

キーワード：妖怪 牛鬼 口承文芸 大衆文化 水木しげる

关键词：妖怪 牛鬼 口头文学 流行文化 水木茂

要旨

日本語：現在において「妖怪」という存在は日本文化を代表するものの一つとして国内外に大きく受け入れられている。また、その中でも「牛鬼」という妖怪は現在サブカルチャーを中心に、広く知られる存在である。しかし、現代における「牛鬼」は本来それぞれ異なる文脈で語られるものである筈の、狩野派「化け物づくし」系統絵巻群にて描かれる「牛鬼」の姿かたち、民間伝承にて語られる「牛鬼」の情報を合わせて一個のキャラクターとして確立され、示されることが多い。このように、妖怪というものが一般に広く認知され、また大衆文化上で受け入れられている概念であるのにも関わらず、その実体からは大きく乖離したような伝承の受け取られ方がされていることを問題点として設定し、本論文では先述の通りに共通する名称の下に異なる情報が統合されて語られている「牛鬼」を事例として、現代的な伝承のありようを論ずる。

摘要

如今，“妖怪”的存在已被国内外广泛接受，成为日本文化的代表性特征之一。其中，被称为“Ushioni”的怪物目前广为人知，主要是在亚文化中。然而，在现代，“牛鬼”应该在不同的语境中谈论，但鹿野派的“化物画”画卷中描绘的“牛鬼”的外观与此相似。在民间传说中，它经常通过结合有关“Ushioni”的信息而被建立并显示为单个角色。因此，尽管妖怪的概念在流行文化中得到了广泛的认可和接受，但民间传说却被认为与现实相去甚远。在本文中，我们将以“牛鬼”为对象来讨论现代民间传说的状况。如上所述，不同的信息被集成在一个通用名称下的示例。

はじめに

「化け物の話を一つ、出来るだけきまじめにまた存分にしてみたい。」

日本民俗学の祖である柳田國男が、一九三八年三月刊行の雑誌「日本評論」に

対して寄せた論考「妖怪談義」は上記の一文によって始まる。柳田は「化け物」、つまり妖怪という存在を、民衆の心意伝承が畏怖という形で発露したもの、民俗学が取り扱う民間伝承の中の一要素として扱っている。この論考をそのまま表題として、一九五六年に修道社より出版された著作『妖怪談義』の冒頭文「自序」において、柳田は「河童」や「たぬき」にまつわる民間伝承の数々を例として挙げながら、「国が自ら識る能力を具える」ことを目的とした、すなわち自己内省の学としての役割を妖怪研究に対して期待する旨を述べている⁽¹⁾。

もちろん、そうした妖怪研究という手法は、民俗学史において必ずしも主流なものではなかった。むしろその実態は、世間の求めるイメージに反して乏しいと言っても過言ではないだろう。例えば現在本邦で民俗学を修めるにあたって、研究成果の主たる発表場所である日本民俗学会においても、昨年度年会には百近い数の発表があった中で妖怪、あるいはそれに類すると思われる内容のものは一、二つ程度であった⁽²⁾。しかし、民俗学が「化け物の話」を「出来るだけきまじめにまた存分に」しなくなっていくのとは正反対に、民俗学と怪異・妖怪とを結びつける表象は未だ一般に強く持たれていると考える。例えば「フォークホラー」と呼称されるような一連のホラージャンルにおいて、(架空の)俗信や民間信仰、あるいは民俗学の研究成果そのものが作中における恐怖を助長させる目的で使用されている⁽³⁾ように、特にサブカルチャーにおいては怪異・妖怪のバックボーンとして「民俗学的、すなわち「フォークロレスク」⁽⁴⁾要素が取りざたされることは多い。

こうした事実からも、現在における民俗学という学問を俯瞰的に捉えようとする場合、「妖怪」延いては「妖怪を研究する学問である民俗学」という表象の定着過程について無視することはできないように考える。本稿では上記について、特に「牛鬼」と呼ばれる妖怪の事例に着目し、考察を進める。

一 妖怪「牛鬼」とは

先述の通り、現在「妖怪」という存在は日本文化を代表するものの一つとして国内外に大きく受け入れられており、それらはしばしば民俗学と結びつけられた表象を持って語られている。また、その中でも「牛鬼」という妖怪は現在サブカルチャーを中心に、広く知られる存在である。

「牛鬼」は、古くは平安時代の随筆『枕草子』にその名前が挙げられているほか、

続く南北朝時代の軍記物語『太平記』にて源頼光、渡辺綱両者によって討伐される怪物として描写されている妖怪である。近世期に入ると浮世草子などの怪談文芸にも登場を果たし、広く怪物として大衆に享受される存在であったと考えられる。特に近世絵師の一派である狩野派によって描かれた「化け物づくし絵巻」と呼称される一連の絵巻作品群では、牛や鬼を思わせる頭部に、昆虫のような胴体を具えた怪物に対して「牛鬼」という名前が多く添えられており、詳しくは後述するが、この姿かたちと名称の組み合わせは現代において最も受け入れられている「牛鬼」像となっている。

そうした文学作品に書かれる怪物としての「牛鬼」とはまた別に、昔話や伝説など民間伝承において、特に西日本を中心に「牛鬼」という怪物は語られている。民間伝承上の「牛鬼」に関連する項目を持つ民俗学や古典籍等の事典類、または後述のように近現代に発刊された妖怪図鑑類においては、その多くが「牛鬼」は淵や海などの水辺に現れる妖怪である」というような説明を付している。しかし、実際の「牛鬼」伝承における「牛鬼」の出現場所は必ずしも水辺に限定されるものではなく、それ以外にも山間部や洞窟、人里など様々な場所に現れるとされており、その伝承内容についても多様性が見てとられる⁽⁵⁾。

また、中国地方や近畿地方の一部では怪火として伝承される「牛鬼」が存在する⁽⁶⁾ほか、愛媛県南予地方を中心に、祭礼に練物として登場する「牛鬼」なども広く知られる存在であり、総合して「牛鬼」は古典籍等の文献資料から、昔話・伝説などの口承文芸、祭礼の練物など、様々な形態でもって日本文化史上に姿を現してきたと言えるだろう。

こうした「牛鬼」に関して、現代では「化け物尽くし絵巻」における「牛鬼」の姿かたちが一般的な「牛鬼」像として流布していることは先述したが、そうした「牛鬼」のビジュアルに対して本来無関係である民間伝承上の「牛鬼」、それも特定地域のものが説明として付されることが多い。即ち本来名称以外の情報を持たない図像に、特定地域の口承やその聞き書きの情報が合わさり、それが一つの「牛鬼」という妖怪キャラクターとして認識されているのである。このように、妖怪というものが一般に広く認知されているものであるのにも関わらず、伝承のありようを必ずしも正確に反映しない受け取られ方が多くなされていることを問題点として設定し、その背景として現代的な妖怪観念の成立や、妖怪に対するイメージのフォークロレスク化について、この「牛鬼」の事例を基に論を展開したい。

二 戦前から戦後昭和期における「牛鬼」の創出

まず「牛鬼」の情報が現代にまで伝承されるにあたり、その要因の一つとして戦前・戦後の昭和期に、様々な媒体にて「牛鬼」の情報が発信されていたことが挙げられる。例えば民間伝承上にて語られる「牛鬼」については、戦前には柳田國男が『山島民譚集(一)』の中で「牛鬼」を水辺に住む牛の伝承に結びつけられる形で触れているほか、山崎里雨「影わに・犬神・牛鬼・河童」や岡田建文「石見牛鬼譚」など、「牛鬼」伝承の報告が雑誌『郷土研究』にて掲載されている⁽⁷⁾。また、一九五〇年代以降からは各自治体の郷土誌等にて「牛鬼」の伝承が多く記録され始めている。これには一九五〇年代より日本で盛んに展開された「民話ブーム」とも言うべき民話運動の中において、各郷土の民間伝承が再発見され始める流れの中に位置付けられると考える。そうした各郷土に残る「牛鬼」伝承が発信される中、愛媛県伊予地方の「民話」に題材をとったとされるかたおかしろう作の児童向け演劇「牛鬼たいじ」や、複数の「民話」を一本の創作童話にまとめ上げた松谷みよ子『まえがみ太郎』など、先述の「民話」を基とした文芸作品も発表され、「牛鬼」は「民話」的な妖怪キャラクターとして作中に登場している。

そうした民間伝承上の「牛鬼」の再発見とは別に、戦後における「牛鬼」祭礼の観光資源化も無視できない要素として挙げられる。祭礼における「牛鬼」は広く南予地方(大洲市内を除く)一円のほか、上浮穴郡の柳谷、小田、東予の菊間町、また高知県では梶原町、西土佐村、宿毛市沖ノ島に広く分布する練物であり、主に当地の秋祭りなどを中心に、神輿渡御の先導役として現れる存在である⁽⁸⁾。この祭礼における「牛鬼」は、戦後早くの段階から観光資源化がなされており、祭礼に関する情報が観光名所の一つとして多くの旅行ガイド本に記載されているほか、祭礼の「牛鬼」を元とした郷土玩具「ブーヤレ」や、「牛鬼」の名前を関する「牛鬼綴れ」や「牛鬼煎餅」などの名産品の製造販売が精力的に行われていたことが、当時の地方新聞社による年鑑などから窺える⁽⁹⁾。一九六七年には通例秋祭りに登場していた「牛鬼」を変則的に南予全体から招致し、五十体余りの「牛鬼」が登場する「牛鬼」パレードが宇和島まつりにて開催され、現在まで続いているなど、「牛鬼」を主役に据えた観光向けの祭りも行われている。そのほか、一九四八年には作中に「牛鬼」祭礼が登場する獅子文六作の小説『てんやわんや』が「毎日新聞」誌上にて連載が開始され、続く一九四九年には新潮社から単行本が出版、

一九五〇年には松竹にて映画化がされるなど人気を博した。文六は他にも「牛鬼」祭礼が作中に登場する小説を執筆しており、『てんやわんや』をはじめとする文学作品への登場も、上述の「牛鬼」祭礼の観光資源化を後押しする一要素であったと考えられる。このように、観光や祭礼にまつわる知識としては旅行本や上記文学作品が、「牛鬼」伝承にまつわる知識としては戦前から続く民俗学の研究成果や民話ブームの中の一連の運動が、それぞれ「牛鬼」を全国的に発信する役割を担っていたと言える。

三 水木しげると「牛鬼」

一九六〇年、漫画家水木しげるが兎月書房の貸し本誌にて「幽霊一家」を掲載、以降貸し本漫画という媒体を経て、青林堂の雑誌『月刊漫画ガロ』上や『週刊少年マガジン』誌上において『墓場鬼太郎』や『鬼太郎夜話』シリーズが展開されることとなる。先行研究として清水潤が指摘している通り⁽¹⁰⁾、当時の水木は紙芝居作家や貸し本漫画を経て怪奇漫画家としての立場を確固たるものにしてしているものの、この時点ではいわゆる妖怪が登場するような作品というものは少ない状態にある。こうした水木を妖怪漫画家として確立させることとなる契機は、一九六七年からの『週刊少年マガジン』誌上における『墓場鬼太郎』改め『ゲゲゲの鬼太郎』の連載の開始であり、その詳しい内容については後述する。以降本作の『マガジン』誌上での掲載と、そのテレビアニメ化を契機として、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、全国の男子児童を中心に妖怪ブームが発生することとなる。この「妖怪ブーム」は当時すでに発生していた、『ゴジラ』シリーズや『ウルトラQ』、『ウルトラマン』などの特撮番組に起因する怪獣ブームや、当時の格闘技業界におけるプロレスブームなどの影響を確認でき、このように先行する文化のフォーマットを踏襲していく形で、多くのメディアが妖怪をキャラクターとして発信し、商業的に利用していく流れが成立していくこととなる。

そうしたブームの渦中、妖怪を主題として取り扱うメディア作品において、妖怪を「日本に実際に存在する・した伝承」として紹介を行うことが多々あった。即ち妖怪が「民俗学的」なものとしてメディアを通して位置付けられていったわけであるが、その流れが生まれる重要な転換点として、水木しげる『墓場鬼太郎』シリーズ内の「地獄の散歩道」という回の存在が挙げられる。これは京極夏彦な

ど、既に多くの水木しげる研究者が指摘しているが⁽¹¹⁾、本話は水木しげる作品としては初めて、妖怪キャラクターを作中に登場させるにあたり、民俗学における研究成果を活用しているのである。本話において、水木は柳田國男の『妖怪談義』に付されている「妖怪名彙」を典拠とし、その記述に基く形で、登場する妖怪キャラクター達をその名称や出身地などと共に紹介している⁽¹²⁾。

水木がこの「民俗学的妖怪」の活用を本格的に行い始めたのは、画報と呼ばれる、ヴィジュアル面に重きを置いた連載形態においてのこととなる。少年誌上における画報の題材は、先述の怪獣ブームやプロレスブームに由来するもののほか、軍事ものや冒険・秘境ものなど、少年誌の主たる購買層である低学年男子児童の需要に応じたジャンルのものが扱われていた。特に妖怪ブーム渦中においては妖怪などの怪奇的題材を取り扱うものが多く見られ、一九七〇年代に入って妖怪図鑑等の独立した書籍が発刊されるようになるまでは、この画報こそが妖怪に関する情報を児童層へ提供する役割を担っていた⁽¹³⁾。佐藤有文や中岡俊哉といった怪奇作家や、石原豪人のような怪奇ものを多く手掛けた絵描きと並んで、水木自身もそうした画報を誌上にて掲載することが多々あり、そこでは前述の通りに「民俗学的妖怪」を題材に執筆することが多々見られた。例えば一九六六年三月二十日発刊の『週刊少年マガジン』八卷十一号に掲載された「深夜の墓場にあつまる妖怪たち」という題の画報では、先述の「地獄の散歩道」同様、柳田の「妖怪名彙」内の記述に則して水木の描く妖怪キャラクターの紹介がなされている⁽¹⁴⁾。

また水木は、そうした画報の連載と同時期、一九六六年から『週刊少年サンデー』誌上にて「ふしぎなふしぎなふしぎな話」という読み物記事の連載を開始する。この「ふしぎなふしぎなふしぎな話」は話の対象となる妖怪を大きく描いた一枚絵に、水木自らが執筆した解説文が添えて載せられる、いわゆる読み物形式の連載記事であり、雑誌編集部が付け加える煽り文にも「大人気」とあるように、当時の読者層にも好評を博していた読み物であったと考えられる。途中何度かの休載を挟みつつも毎週連載されていたこの連載執筆に際して、水木は連載の題材を過去の先行する文献に求め、典拠とした上で妖怪を紹介している。この「ふしぎなふしぎなふしぎな話」は一九六七年まで続く連載記事であったが、「牛鬼」もまた、その第十五回にて題材として扱われ、紹介がなされている。ここでは「日本に存在している伝承」として、鳥根県大田市大浜村字波路浦の「牛鬼」伝承⁽¹⁵⁾を引いた文章が掲載されており、そこに先述の狩野派妖怪絵巻における「牛



図一：中村雄二郎「無気味なものの形象化<化物づくし>」

『美術手帖』八月号、美術出版社、一九六四年より牛鬼図

鬼」の図像を基としたイラストが挿絵として添えられている。水木は本イラストを描くに際し、『美術手帖』八月号(図一) 内に写真が掲載されている、「鳥羽僧正真筆」と記された狩野派「化物づくし」を基にしていることが先行研究にて示されており⁽¹⁶⁾、この形式は続く一九七四年の『妖怪なんでも入門』や『妖怪クイズ百科じてん』にも受け継がれている。

「ふしぎなふしぎなふしぎな話」での「牛鬼」の掲載から二年後の一九六八年、『週刊少年マガジン』十巻五八号並びに十巻五九号にて、『ゲゲゲの鬼太郎』「牛鬼 前編」、「牛鬼 後編」が掲載され、「牛鬼」は漫画上のキャラクターとしての登場を果たす。ここでは「ふしぎなふしぎなふしぎな話」における描写と同様に、「牛鬼」は狩野派『化物づくし絵巻』系統の絵巻に由来する姿で描かれ、海辺に現れるなどといったような先述の伝承に由来すると思しき描写がなされている一方、「牛鬼を殺したものが次の牛鬼へと変化する」、「正体は気体状の生命体」といった水木によるオリジナルの設定が加えられている。なお、先述の「ふしぎなふしぎなふしぎな話」の「牛鬼」とは異なり、この設定はあくまでも漫画内に限るものとして、『妖怪おもしろ大図解』を除く水木の児童向け妖怪図鑑等には受け継がれなかった。水木は民間伝承上の「牛鬼」の情報に、絵巻物に描かれる「牛鬼」の画像資料を当てはめたものを、先述した「民俗学的妖怪」のうちの一種、「牛鬼」とありとし、自著の妖怪図鑑にて何度も掲載を行った一方、上記漫画『ゲゲゲの

鬼太郎』内で語られる水木オリジナルの「牛鬼」の設定に関してはそれらとは切り離しており、水木の提示する「日本に存在する伝承」にそれを流入させることはなかったと言える。また、水木が「牛鬼」を確立させる上で取り入れなかった設定にも着目が必要である。例えば水木は「ふしぎなふしぎなふしぎな話」において「牛鬼」の姿に狩野派「化物づくし」のものを使用したことは先述した通りであるが、同じく「牛鬼」が記載されている鳥山石燕『画図百鬼夜行』は参照されていない。当時妖怪造形の典拠として多く鳥山石燕の著作物を使用していた⁽¹⁷⁾水木が何故「牛鬼」に限ってのみ狩野派「化物づくし」を使用したのかについての真意は不明であるが⁽¹⁸⁾、事実として以降の大衆的な「牛鬼」の表象から『画図百鬼夜行』のものが排除され、狩野派「化け物づくし」のものが市民権を得ている状況への関与は明らかである。この点については続く第四章で詳しく述べる。

四 現代的妖怪観念における「牛鬼」表象の形成

『ゲゲゲの鬼太郎』内の「牛鬼」における水木が創出した独自の設定はその後、先述の通り水木自身が執筆を行った図鑑等作品には継承されなかった一方、水木が形成した通俗的な妖怪観念の影響を受けた作品では、それらがしばしば「牛鬼」キャラクターに対する設定として転用されている。また、Twitter（現X）などのSNS上での書き込みやインターネット上の個人サイトでの記述、あるいはテレビ番組における説明などにおいて、「ふしぎなふしぎなふしぎな話」や『ゲゲゲの鬼太郎』における「牛鬼」の設定をしばしば「民俗学的」な、即ち実際に日本に存在する「牛鬼」に関する伝承と混同、あるいはそのものであるかのように伝承されることも見られる⁽¹⁹⁾。よって本章では、一九六〇年代から現代にかけての「牛鬼」が登場する創作作品、あるいは「牛鬼」の情報や形態が記載されている図鑑類を調査し、そこに現れる「牛鬼」を事例として、戦後昭和期の妖怪ブームがどれほど現代の妖怪表象に影響を及ぼしているかについてを考察する。

まず、「牛鬼」、もしくは「牛鬼」を基にしていることが明言されているキャラクターが作中に登場する創作作品について述べる。

上記表一から、まず狩野派絵巻における牛や鬼の頭部に虫の腹部を持つような「絵巻型」が創作作品においては最も多く、一九六〇年代以降絶え間なく現代まで続いていることが読み取れる。この絵巻型の「牛鬼」は一九九〇年代までは主

表一：「牛鬼」登場作品一覧

牛鬼が登場する作品					
番号	名称	資料タイプ	出現場所	形態	行動・概要
1	ウシオニ (親子)	創作童話	淵	怪物型 (牛頭鬼身)	太郎 (主人公) に餅をねだり、分けてもらいう。その後馬をねだるが断られ、代わりに木彫りの馬を作ってもらう。最後は太郎と牛鬼の影を泣いて惜しむ。
2	牛鬼 (ウシオニ)	読み物	海	絵巻型	漁師たちが海岸に船を浮かべサバ釣りをしていたところ、突然海岸の方から、「行こうか」と声がする。漁師がからかい半分に、「おう、きたけりゃ、こいゃ」と答えると、何かが海中に踊りこんで船に向かってくる。見ると牛鬼であったので漁師たちは必死になって船を漕ぎ陸地へとあがってきた。機にあった出雲大社の護符を投げつけると牛鬼は退散した。
3	牛鬼 (ウシオニ)	特撮映画		東映型	三つ目、一本角、たてがみを持つ造形。映画内では特に役割を持たない端役。
4	牛鬼 (ギョウキ)	漫画	海	絵巻型	正体は気体のような生命。牛鬼を殺したものが次の牛鬼となり、正気を失って暴れる。作中では鬼太郎が牛鬼へと変化した。村に祀られている神、廻廊羅様によって先述の本体のみを分離し、封印された。
5	牛鬼 (ウシオニ)	民話集 (挿絵)		東映型	挿絵
6	牛鬼 (オシヨニン)	創作童話	山	獣型 (牛)	山から下りてきて暴れる。鬼の顔のように見えたのは入れ墨であり、牛鬼ではなかったの暴れ牛であった。
7	牛鬼 (ギョウキ)	アニメ	海	絵巻型	大筋は45と共通。
8	牛鬼	特撮ドラマ		鬼型	腹みそを好む一本角の赤い鬼。
				備考	作中、ウシオニは人の影を舐め、舐められた人は死ぬと語られている。子どもは挿絵ではホルス・タイン種のように描かれている。
				作品情報	『まえがみ太郎』、松谷みよ子著 渡辺学絵、福音館書店、1965年
				備考	『ふしぎなふしぎなふしぎ』話15「牛鬼」(『週刊少年サンデー』8巻12号)、水木しげる、小学館、1966年
				作品情報	『妖怪大戦争』、東映、1968年
				備考	『ゲゲゲの鬼太郎』「牛鬼 前編」(『週刊少年マガジン』10巻58号)、「牛鬼 後編」(『週刊少年マガジン』10巻59号)、水木しげる、講談社、1968年
				作品情報	『ふるさと百話』、森脇太一談、NHK 松江放送局、1970年
				備考	『新日本こどもの文学12 牛鬼退治』、かたおかしろう作 井上洋介絵、新日本出版社、1970年
				作品情報	『ゲゲゲの鬼太郎』第15話「牛鬼」、原作水木しげる、東映アニメーション、1971年
				備考	『行け！牛若小太郎』、東宝、1974年

番号	名称	資料タイプ	出現場所	形態	行動・概要	備考	作品情報
9	牛鬼火 (ウシオニビ)	児童書		怪火型	雲や雨の降る夜に火が纏わりつく。	文中では一貫して「牛鬼 (ウシオニ)」表記	『妖怪100物語』、水木しげる、小学館、1979年
10	牛鬼 (ギユウキ)	アニメ	海	絵巻型	大筋は5と共通。		『ゲゲゲの鬼太郎』第42話「妖怪牛鬼」、原作水木しげる、東映アニメーション、1986年
11	牛鬼 (ウシオニ)	漫画		絵巻型	主人公鬼太郎の仲間。怪力が特徴とされる。		『鬼太郎地獄編』(『月間少年マガジン』6月号~9月号)、水木しげる、講談社、1987年
12	ウシオニ	特撮ドラマ		独自造形型	昔は鬼の顔をした牛であり、人間を突き飛ばすしか能がなかった。現代ではウシオニの遺伝子が込められたライフルを持ち、これに撃たれた人間は牛鬼人間(盗賊)となる。	撃たれた人間が牛鬼人間になる、という設定に『鬼太郎』の影響が見られる。	『忍者戦隊カクレンジャー』第38話、東映、1994年
13	牛鬼 (ギユウキ)	アニメ	海	絵巻型	大筋は5と共通。		『ゲゲゲの鬼太郎』第6話「暴走! 鬼太郎牛鬼」、原作水木しげる、東映アニメーション、1996年
14	牛鬼 (ギユウキ)	漫画		絵巻型	作中人物ジェイガルシア・サターン聖が変身。光線を放つ、不死身などの特殊能力を持つ。		『ONEPIECE』、尾田栄一郎、集英社、1997年~
15	八尾牛鬼 (ギユウキ)	漫画		独自造形型	上半身は牛、下半身はタコの足になっている。		『NARUTO—ナルト—』、岸本斉史、集英社、1999~2014年
16	牛鬼	漫画		絵巻型	上半身は牛、下半身は蜘蛛となっている		『GANTZ』、奥裕哉、集英社、2000~2013年
17	牛鬼 (ウシオニ) 怪獣ゲロンガ	特撮ドラマ	山、洞窟、市街地	独自造形型	現地では牛鬼と呼ばれ畏れられている怪獣		『ウルトラマンマックス』第29話「怪獣はなぜ現れるのか」、円谷プロダクション、2005年~2006年
18	牛鬼 (ギユウキ)	アニメ	海	絵巻型	大筋は5と共通。		『ゲゲゲの鬼太郎』第14話「鬼太郎死す!? 牛鬼復活」、原作水木しげる、東映アニメーション、2007年
19	牛鬼	漫画		人型、絵巻型、不定形型、不定形	不定形なウィルスの存在。主人公がそれに感染し、牛鬼となった正気を失う。	牛鬼をウィルスの存在として感染した主人公が牛鬼になる、という設定には『鬼太郎』の影響が見られる。またヒロインが濡れ女の実子という設定は牛鬼と濡れ女を関係付けて描写する石見の伝承に由来すると考えられる。	『妖怪のお医者さん』、佐藤友生、講談社、2007~2011年

番号	名称	資料タイプ	出現場所	形態	行動・概要	備考	作品情報
20	牛鬼 (ウシオニ)	漫画		人型、絵巻型	主人公の仲間。平安時代の生まれで、母親を喰い殺した牛鬼 (絵巻型) への憎悪から鬼になり、牛鬼を殺害し、復讐を果たすが、この世への憎しみは消えずに無関係の人間を殺害するようになった。呼ばれるようになった。	牛鬼を殺害したものが牛鬼と呼ばれるようになった、という設定に『鬼太郎』の影響が見られる。	『ぬらりひょんの孫』、椎橋寛、集英社、2008～2012年
21	牛鬼 (ギユウキ)	特撮ドラマ		独自造形型	主人公が鬼に心を奪われて変化した伝説的存在。	作中重要人物が変化してしまうという展開は『ゲゲゲの鬼太郎』に由来するものか。	『仮面ライダーデューク』第18話「サボる 響鬼」、第19話「終わる旅」、東映、2009年
22	ゴズナグモ	特撮ドラマ		独自造形型	蜘蛛と牛の要素を持つ。妖怪牛鬼伝承のルーツという設定。	牛と蜘蛛という意匠は絵巻型を元に行っていると思われる。	『侍戦隊シンケンジャー』第23話「暴走外道衆」、第24話「真侍合体」、東映、2009～2010年
23	牛鬼	絵本、連載	海	ブーヤレ型	海のシーンで唐突に出現。		『かなしきデブ猫ちゃん』、早見和真文、かのうかりん絵、愛媛新聞、2018～2022年
24	牛鬼 (ギユウキ)	アニメ	海	絵巻型	大筋は5と共通。		『ゲゲゲの鬼太郎』第22話「暴走!! 最恐妖怪牛鬼」、原作水木しげる、東映アニメーション、2018年
25	マトイマル	ソーシャルゲーム		人型 (擬人化: 女性)、絵巻	四本の角が生えた、薙刀を持った女性。	立ち絵背景に絵巻型牛鬼が描写されている。	『アークナイツ』、Yostar、2019年～
26	牛崎間美 (ウシザキウルミ)	ゲーム	三途の川	人型 (擬人化: 女性)	赤子の石像を抱いた、牛のような角の生えた女性の姿。	擬人化キャラクター。石見の伝承が下敷きとなっていると考えられる。	『東方鬼形獣』、ZUN、上海アリス幻樂団 (同人頒布)、2019年
27	牛鬼 (ギユウキ)	ゲーム		絵巻型	暴れ牛と毒蜘蛛の怨霊から生まれた妖怪。猛毒を持つ。		『妖怪ウォッチ4』、レベルファイブ、2019年
28	牛鬼 (ギユウキ)	ゲーム		絵巻型	毒を吐くほか、体液も毒性を持つ。		『仁王2』、コーエーテクモゲームス、2020年
29	牛鬼	ソーシャルゲーム		人型 (擬人化: 男性)	牛のような角の生えた男性。		『ラグナドール 妖しき皇帝と終焉の夜叉姫』、グラムス、2021年～
30	ギユウキモン	アニメ		独自造形型	デジモンという生物の一種。牛頭型の上半身と蜘蛛の下半身を持つ。戦いを挑まれて負けるとギユウキモンの姿となる。	『ゲゲゲの鬼太郎』の牛鬼を下敷きに行っていると考えられる。	『デジモンゴーストゲーム』、東映アニメーション、2022年

に水木の作品に登場するものであったが、二〇〇〇年代からは水木以外の作家の作品内にも現れる事例が増えている。これについては、幼少期に水木の作品や後述する妖怪図鑑に触れており、影響を受けていた世代が二〇〇〇年代以降発信者となり始めたという理由が考察できる。一方、東映の特撮映画『妖怪百物語』や『妖怪大戦争』に登場した姿である「東映型」やそのまま牛の姿でえがかれる「牛型」、牛の頭に人や鬼の体を持つ「牛頭型」などの「牛鬼」像は一九七〇年代までに少数存在しているのみであり、一九八〇年代以降は存在を確認できなかった。確認できたこれら少数の作品群はいずれも水木がまだ「牛鬼」を自作品に出していない、あるいは出してまだ年代を経ていないうちに製作された作品であり、水木の「牛鬼」によって絵巻型が定着した一九八〇年代以降は現れなくなったのだと考えられる。また先述した通り、水木が自作に用いなかった『画図百鬼夜行』の「牛鬼」像や怪火伝承としての「牛鬼」もまた、以降の流れにはほとんど姿を現すことはないことから、水木「牛鬼」の影響力の強さをうかがい知れるだろう。そのほか、上記に当てはまらない、あるいは上記を下敷きとして作家が独自の造形を行っている「独自造形型」の「牛鬼」もまた一九九〇年代から見られるようになる。この独自造形型は主に動物としての牛、或いは絵巻型「牛鬼」の要素を基として造形がなされており、「牛鬼」に対する一般的なイメージが成立しているが故に発生し得る類型であると考ええる。また、二〇〇〇年代からは人型「牛鬼」も見られ始めており、サブカルチャー全体における擬人化文化の確立に由来するほか、独自造形型と同様に「牛鬼」表象が一般化しているがために成立した造形であると考えられる。

また、創作作品における「牛鬼」のキャラクター設定に関して、『ゲゲゲの鬼太郎』における「牛鬼」の、「牛鬼」を殺した者が次の「牛鬼」となるという設定を継承、あるいはオマージュするものが多く見られることも特筆すべき事柄である。例えば特撮テレビドラマ『忍者戦隊カクレンジャー』第三八話に登場するウシオニは妖怪「牛鬼」を元としたキャラクターであるが、このキャラクターは自身の遺伝子を込めたライフルを持っており、撃たれた人間が牛鬼人間となる、という設定を持っている。また、佐藤友生の漫画『妖怪のお医者さん』では、「牛鬼」は不定形なウイルス的な存在であるとされており、主人公がそれに感染することで「牛鬼」となって正気を失う展開が描かれる。そのほか、「牛鬼」が第三者を「牛鬼」に変えるという設定は漫画『ぬらりひょんの孫』や『牛鬼vs上級国民 尾籠憲

一異色短篇漫画集⑦』、特撮テレビドラマ『仮面ライダーディケイド』、テレビアニメ『デジモンゴーストゲーム』でもオマージュに近い形で使用されているなど、『ゲゲゲの鬼太郎』の「牛鬼」の設定を汲むものは一九九〇年代からしばしば見られるところとなった。この点に関して、発端である『ゲゲゲの鬼太郎』という作品シリーズが、一九六〇年代から現代にかけて、約十年置きにテレビアニメ化がなされていることが挙げられる。原作において「牛鬼」が登場する話はアニメシリーズにおいて、各シリーズ毎に微妙なアレンジを加えながらも原作に概ね忠実なものとしアニメ化がされており、こうしたアニメ版における「定番」化もまた「牛鬼」が妖怪を取り扱うサブカルチャーにおいて広く知名度の高い設定となっていたことの原因の一つであるとも考えられる。

五 妖怪図鑑に記載される「牛鬼」

では、創作作品ではない、図鑑等の書籍では「牛鬼」はどのように扱われてきたのだろうか。以下は主にイラストが添えられた図鑑類を対象に、収集された「牛鬼」事例の一覧である。

妖怪図鑑というジャンルは、図鑑という書籍メディアの中でもかなり特殊な立ち位置にあると考えられる。通例図鑑といえば、動物図鑑や昆虫図鑑、魚類や鳥類などの図鑑が挙げられるであろう。しかし、それらは実在している自然界の生物や現象に対して、自然科学の見地から記されたものであり、必然的にその内容には学術的な確実性が要求されるものである。一方で、円谷プロダクション製作の特撮ドラマ『ウルトラマン』シリーズに登場する「怪獣」を収めた怪獣図鑑や、株式会社ゲームフリーク開発のゲームソフト『ポケットモンスター』シリーズに登場する架空の生物「ポケモン」を収めたポケモン図鑑など、架空のキャラクターを取り扱う図鑑も存在しているが、それらはいわば図鑑という既に確立されたフォーマットに対するパロディ的な側面のある、学術性を伴わない娯楽的な書籍であると言えるだろう。では、妖怪図鑑はどうだろうか。妖怪図鑑が取り扱う妖怪という対象は、動物や昆虫などのように自然界に実在する存在ではなく、またその記述に対する確実性は担保されることのない状況にあると考えられる。しかし、その妖怪の多くは過去の文献資料の記述や民俗学における研究成果によって報告されるものであり、また妖怪図鑑の多くが学術的な姿勢を（少なくとも読

表二:「牛鬼」記載図鑑一覧

牛鬼の姿・記載がある図鑑・事典類					
番号	名称	地域	出現場所	形態	行動・概要
1	牛鬼	鳥根県 温泉津地方	海	東映型	昼は寝ているが、夜になると漁船を追いかけ、漁師の捕った魚を奪う。それで足りなければ陸に上がり人家を襲う。お守りに弱い。
2	牛鬼	鳥根県	海	東映型	漁船をどこまでも追いかけ、漁師の捕った魚を奪う。それで足りなければ陸に上がり村を襲う。お守りに弱い。
3	牛鬼	徳島県	海	絵巻型	漁師の船をしつこく追いかけて、船が沈まなければ家は家まで入り込み襲う。
4	牛鬼	鳥根県	海	絵巻型	牛鬼の近くに漁を出す、船を沈められる。
5	牛鬼火				通行人の笠や蓑に纏わりつく怪火。雲の降る十月過ぎの夜に現れる。
6	牛鬼		海	根香寺型	通りかかる船を襲う。
7	牛鬼	鳥根県 石見国	海	東映型	漁船を追いかけ、漁師の捕った魚を奪う。それを拒むと船をひっくり返すので、漁師は牛鬼を見ると細ごと魚を捨てて逃げた。お守りに弱い。
8	牛鬼		淵、海	怪物型 (鬼頭牛身)	しばしば里に出てきて人畜を喰う。美女の姿に化けることや、濡れ女・磯女と一緒に現れることもある。
9	石見の牛鬼	鳥根県石見	海	絵巻型	海の中から女が現れ魚を欲しがったので与えた。すると女は牛鬼に変身し襲い掛かってきたが、家にあった刀が飛んできて退治した。
10	牛鬼	山口県	海や沼、川	獣型(牛)	人を食い殺すのが好き。人の影を喰う。
11	牛鬼	近畿・中国・四国、九州 地方	海、山	獣型(牛)、 東映型、 絵巻型	凶暴で人畜に害をなす。出会ったら病になる、影を妬められると死ぬ(和歌山県) 濡れ女などと共に現れる(山陰、北九州) 怪火(鳥取、鳥根) 人を助ける(和歌山県三尾川谷)
12	牛鬼	鳥根県、山口県など	海、淵	絵巻型	人を襲う。
13	牛鬼	東海・近畿・中国・四国・九州地方	海や淵、滝	怪物型 (鬼頭牛身)	人畜を襲い、出会っただけで病になる。
					備考
					特撮映画「妖怪大戦争」のスチール画がそのまま載る。
					特撮映画「妖怪大戦争」のスチール画がそのまま載る。
					『妖怪なんでも入門』、水木しげる、小学館、1974年
					『妖怪クイズ百科じてん』、水木しげる、小学館、1979年
					『妖怪クイズ百科じてん』、水木しげる、小学館、1979年
					『学習まんが・ふしぎシリーズ』⑤ 日本の妖怪なぞとふしぎ、佐藤有文、小学館、1983年
					『妖怪大図鑑』、佐藤有文、小学館、1987年
					『日本妖怪図鑑』少年少女版、岩井宏実文 川端誠絵、文化出版局、1987年
					『妖怪大図鑑』、水木しげる、講談社、1994年
					『図鑑・日本の妖怪』、さこやん、偕成社、1997年
					『百鬼夜行解体新書』、村上健司 + スタジオハード MX、コーエー、2000年
					『日本の妖怪大図鑑』③海の妖怪、常光徹監修、ミネルヴァ書房、2010年
					『にっぽん妖怪大図鑑』、常光徹監修、ポプラ社、2011年

番号	名称	地域	出現場所	形態	行動・概要	備考	作品情報
14	牛鬼	西日本	海や淵、 滝	獣型 (牛)	出会っただけで殺される。近づくと人を病気にしたり、食べる(紀伊半島、四国)、海底にいる(中国)、女性に化けて油断させそのすきに襲う(鳥根県)、美人の女性に化けるのが得意(和歌山県、四国)		『妖怪探検図鑑 一身近な山や水辺の妖怪』村上健司文天野行雄絵、あかね書房、2013年
15	牛鬼	中国・近畿・四国・九州	海、川、滝	絵巻型	濡れ女と共に出る。影を喰いとる。		『妖怪キャラクター大辞典』、小松和彦飯倉義之監修、カンゼン、2014年
16	牛鬼	西日本各地	海や淵、 滝	獣型 (牛)	漁師を襲う。美女に変化(九州、中国)怪火(鳥取、鳥根)		『妖怪ひみつ大百科』、村上健司、永岡書店、2015年
17	牛鬼	全国	水辺	絵巻型	普段は水中に隠れており、近づいた人間を襲う。毒を吐いたり、人間に化けたりなどする。濡れ女とコンビを組むこともあるとされる。		『超こわい! 超ふしぎ! 日本の妖怪大集合200』、山口敏太郎、西東社、2015年
18	牛鬼		海岸、浜辺	絵巻型	人を喰い殺すほか、街中に病を振りまく。戸の名手がこれを退治するも、祟りによって一家全員が病死する。	その正体について、「殺事され成伊藤新九郎編 怪人ふくふく絵、佐倉出版社、2015年	『いちばんおもしろい妖怪図鑑』、門賀美央子文アマギ堂絵 東雅夫監修、山と溪谷社、2016年
19	牛鬼	西日本	浜辺や 淵、滝	絵巻型	濡れ女と共に現れたり女性に化けたりする。	謎の多い妖怪とされる。	『ときめき妖怪図鑑』、門賀美央子文アマギ堂絵 東雅夫監修、山と溪谷社、2016年
20	牛鬼	中部・近畿・中国・四国		怪物型 (二足歩行)	人音を喰い殺す。人間の影を食べたり、洪水を起こしたり、人間に変身したりする。		『妖怪最強王図鑑』、多田克己監修、学研プラス、2018年
21	牛鬼	東海・近畿・中国・四国・九州地方	海	絵巻型	毒を吐く、人を喰い殺す、姿を見ただけで高熱を出して死ぬなど。「石は流れる木の葉は沈む、牛は嘶く、馬は吠える」などとあべこべなことをいうと助かる。	5m15mと記載。	『リアル妖怪大図鑑』、森野達弥監修、高橋書店、2019年
22	牛鬼	四国地方	海部、山奥	絵巻型	人を襲い、船を沈める。姿を見たり、影を喰め取られると病となり、死ぬ。ぬれ女とペアであるとされる。	水と関係が深いとの記述。体長は10メートルほど。	『戦う妖怪大百科最恐怖の怪決定版』、イリサワマコト、西東社、2019年
23	牛鬼	西日本	海	絵巻型	口から毒を吐き、人を襲う。	挿絵では絵巻型だが、怪物型(牛頭人身)などの存在も触れられる。	『すごいぜ!! 日本妖怪びくろり図鑑』、木下昌美著、しげおか秀満絵、辰巳出版、2019年
24	牛鬼	西日本	海、淵、滝	絵巻型	女性から赤ちゃんを手渡される。すると身動きができなくなり、海から現れた牛鬼に喰い殺される。	北斎季親「化物尽絵巻」も掲載、同一妖怪として扱われている。	『妖怪バトル&大図鑑』、村上健司監修井上淳哉 なんばさび絵、KADOKAWA、2021年
25	牛鬼		全域	絵巻型	姿を見ただけで禍をもたらす。濡女と運搬して襲うこともある。美女に変化して惑わすこともある。人間の影を食べ、食べられた人は死ぬ。退治できても祟りによって家が途絶えたりする。		『日本妖怪図鑑100』、やまかみこう、マイウェイムック、2022年

者に向けては) 見せているように、妖怪図鑑は前述した学術的図鑑と非学術的図鑑の中間の位置に属するものであると考えられる。

さて、先にも述べた通り、妖怪図鑑の記述は必ずしも実際の伝承や記録、研究成果に則したものとなっているとは限らない。そもそも画像や形態の記録が残っていない妖怪に対して姿を与えること自体が脚色的一种であると言えるだろう。前節で示した、「ふしぎなふしぎなふしぎな話」における「牛鬼」のビジュアルと伝承の組み合わせなどもその一つである。

表三：「牛鬼」図鑑における形態描写

	1960 s	1970 s	1980 s	1990 s	2000 s	2010 s	2020 s	累計
絵巻型	0	2	0	1	1	8	2	14
東映型	0	2	1	0	1	0	0	4
牛型	0	0	0	1	1	2	0	4
牛頭型	0	0	0	0	0	1	0	1
鬼頭牛身型	0	0	1	0	0	1	0	2
その他	0	0	1	0	0	0	0	1
累計	0	4	3	2	3	12	2	32

表三は妖怪図鑑における「牛鬼」の形態描写をまとめたものである。伝承上の「牛鬼」と、狩野派絵巻の「牛鬼」の姿は本来関わりのないものであったが、殊妖怪図鑑においては伝承上の「牛鬼」に対する形態描写として狩野派絵巻のものが組み合わされていることが多い。特に一九九〇年代から絵巻型の「牛鬼」が水木外の妖怪図鑑にも現れ始め、二〇一〇年代には同年代に書かれた「牛鬼」の三分の二が絵巻型で占められるようになっている。一方でその他の形態は二〇〇〇年代にまでは幾つか見られたものの、二〇一〇年代以降は妖怪図鑑の総数から比べると非常に少数派の描写となっている。このように、半ば学術性を持つ妖怪図鑑という媒体であっても「牛鬼」の形態描写としては絵巻型のものが主流として扱われるようになっていることが示される。

表四：「牛鬼」図鑑におけるキャプション

	1960 s	1970 s	1980 s	1990 s	2000 s	2010 s	2020 s	累計
漁師襲撃	0	4	2	0	0	1	0	7
濡れ女	0	0	1	1	1	4	2	9
影捕食	0	0	0	1	1	3	1	6
病	0	0	0	0	1	6	0	7

人間変化	0	0	0	0	0	5	1	6
怪火	0	1	0	0	1	1	0	3
その他	0	0	0	0	1	3	1	4
累計	0	5	3	2	5	23	5	42

また、妖怪図鑑における「牛鬼」に対するキャプションをまとめたものが、上記表四である。

ここで注視したい事柄は、一九七〇年から二〇二〇年にかけて単に「牛鬼」が漁師を襲撃するという「漁師襲撃」型のキャプションが減少していること、そして二〇〇〇年代以降ではキャプションが多様化していることの二点である。漁師襲撃型とは島根県温泉津郡に伝わるような、夜の海で漁師に対して襲い掛かり、その後陸地の民家にまで追跡をするも護符や霊剣によって退散させられるというようなものであり、これは水木が初めて「牛鬼」を紹介した「ふしぎなふしぎなふしぎな話」において使用されたフォーマットの話である。一九七〇年から一九八〇年にかけて、妖怪図鑑において「牛鬼」を紹介する際にこの話が選ばれている理由は、この「ふしぎなふしぎなふしぎな話」を下敷きにして執筆されているためであると考えられる。しかし、一九九〇年代に入ると漁師襲撃型と同様の話でありつつ、濡れ女という別種の妖怪も登場する「濡れ女」型に刷新されているほか、二〇〇〇年代を境に「牛鬼」が病を撒き散らすというような「病」型や、「牛鬼」が人間の影を食べるという「影捕食」型、人間に姿を変えて現れるという「人間変化」型の説明が見られるようになっていく。これに関しては、妖怪図鑑が娯楽的な性質を持った書籍であることから、より多様で読者を楽しませ得るような「牛鬼」伝承が数ある過去資料から採択されていったためであると考えられる。また、この時代からはインターネットがより一般的な技術となっていることから、ウィキペディアの記事や「怪異妖怪伝承データベース」⁽²⁰⁾などのウェブサイトを通じて「牛鬼」を含む多くの妖怪の情報が拡散されていった。こうした状況下から、近年の「牛鬼」に関する説明は多様化していったと考えられる。

このように、二〇〇〇年以降には水木の「牛鬼」と同様、絵巻型「牛鬼」の造形に対して、民間伝承上の「牛鬼」の解説を加える作品は創作作品、図鑑に限らず増加していく傾向にあった。ここから、絵巻型「牛鬼」の造形と民間伝承の「牛鬼」の解説とが合わさった物が妖怪「牛鬼」である、という表象が定着していると論じられる。

おわりに

妖怪を「図像に基づく形態」と「伝承に由来する生態」の二つの情報を兼ね備えるものであるとする現代の通俗的な妖怪観念は、水木しげるの著作をはじめとする多数の妖怪作品によって、一九六〇年代から現代にかけて形成されたものであった。現代、一般に「牛鬼」として認識されている一揃いの情報群は、そうした妖怪観念の形成の中で、数ある「牛鬼」を取り巻く情報から取捨選択がなされた上で、傾向性をもって形成された表象であると結論付けられる。そして、そうした「牛鬼」表象が由緒正しい、あるいは「民俗学」的なものであるとして、様々なメディアを通じ、現代的な伝承の実践が行われているということは既に論じた通りである。第五章で述べてきた通り、元来学術論文や学術書のような専門性を持ったメディアが主たる享受先であった民俗学の成果の中で、とりわけ「妖怪」に関する情報は娯楽のための消費という名目上で様々なメディアに取り上げられ、一般層のアクセスが容易なものとなってきた歴史がある。また、そうした「妖怪」娯楽文化も自ら「民俗学」的であることを一種のフレーバーとして用いてきた。はじめに述べたような、現代における民俗学という学問と「妖怪」文化とのつかず離れずの関係性はこうした潮流を基として成り立ってきたものであると考えられる。

なお、今回の論文ではそうした現代的な伝承の実践の事例として、漫画やテレビ番組、ゲームなどのサブカルチャーを扱った一方、インターネットにおける妖怪表象の伝承という点については触れることが出来なかった。特に二〇〇〇年代以降はSNSの普及によって誰もが発信者となり得る時代となり、また、ウィキペディアなどに代表されるような百科事典サイトへのアクセスが容易になったことに起因する妖怪情報の拡散性が、それまでの時代に比べて顕著となっている。今後の展望としては、インターネットを含むメディアの流通による、妖怪表象の創造と伝承、そしてそれらに対するフォークロレスク的なアプローチについて、更に研究を進めていきたいと考えている。

注

- (1) 本稿では『柳田國男全集』第六集、筑摩書房、一九八九年を参照。
- (2) 日本民俗学会第75回 <https://www.nenkai75.fsjnet.jp/> (最終確認二〇二四年五月六日)
- (3) ここ数年で話題を呼んだ(現実には存在しない)因習を主題としたフォークホラー作品とし

- ては、スウェーデンのとあるカルト集落に迷い込んだ主人公グループの恐怖を描くアリ・アスター監督作品『ミッドサマー』（二〇一九年公開）や、台湾山中の村落にて祀られている秘仏の呪いを描いたケビン・コー監督作品『呪詛』（二〇二二年NETFLIX配信）などがある。
- (4) この概念については、島村恭則『みんなの民俗学 ヴァナキュラーってなんだ?』平凡社新書、二〇二〇年や、ジェフリー・A・トルバート著、廣田龍平訳『フォークロレスク入門』、『現代思想』第五二巻六号、青土社、二〇二四年などに詳しい。
 - (5) 伝承上の「牛鬼」の形態や出現場所、話型については修士論文「」（二〇二三年度、國學院大學大学院提出）にて論じた。こちらにもいずれ別個論文として出したいと考えている。
 - (6) 『季刊民話』一号 一九七四年や『異説まちまち』一七四八年（『日本随筆大成』巻九、日本随筆大成編集部、一九二七年、日本随筆大成刊行会）を参照
 - (7) しかし、これらは単に採集されたものの紹介程度に留まっており、ここでの「牛鬼」は飽くまでも戦前の民俗学における研究対象のうちの一事例という扱いであった。
 - (8) 宇和島市誌編さん委員会編『宇和島市誌』、宇和島市、一九七四年（本稿では復刻版、二〇〇五年を参照）
 - (9) 愛媛新聞社編『愛媛年鑑』昭和二九年版、愛媛新聞社、一九五三年
観光事業研究会編『日本案内記』中国四国篇、日本交通公社、一九五四年
 - (10) 清水潤「妖怪ブーム」前夜の草木しげる」、「論樹」第二十四号、論樹の会、二〇一二年
 - (11) 京極夏彦「通俗的「妖怪」概念の成立に関する一考察」、小松和彦編『日本妖怪学大全』、小学館、二〇〇三年
 - (12) なお「地獄の散歩道」での妖怪に対する着目はその後連続しない、飽くまでも一時的なものに過ぎず、『墓場鬼太郎』作中における「民俗学的妖怪」路線の定着には至っていない点には留意が必要である。
 - (13) 高橋明彦「猫目小僧と妖怪ブーム 一九六八年の『少年キング』と少年的知識」、小松和彦編『妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草紙からマンガ・ラノベまで』、せりか書房、二〇一〇年
 - (14) 清水潤「一九七〇年代の「妖怪革命」—草木しげる『妖怪なんでも入門』」、一柳廣孝編著『オカルトの帝国—1970年代の日本を読む』、青弓社、二〇〇六年
 - (15) 山崎里雨、小松和彦編『怪異の民俗学② 妖怪』、河出書房新社、二〇〇〇年（初出は『郷土研究』第七巻第四号、一九三三年）
 - (16) 御田鉞：『草木絵のモトエ 総集編』、うしみつのかね、二〇一六年
 - (17) 正確には田中初夫編『画図百鬼夜行』が直接の典拠として用いられていたのではないかと『草木絵のモトエ 総集編』の中で御田鉞：は考察している。
 - (18) 論者個人の意見としては、大きな牛としか形容しようのない『画図百鬼夜行』の「牛鬼」よりも、独特のキメラ然とした造形である「化け物づくし」の「牛鬼」の方がキャラクター性に富んでおり、漫画家である草木が少年誌の読み物に後者を採用するのは必然であると考え。
 - (19) ここではそうした例の一つとして、フジテレビにて二〇二三年四月二日に放送された「妖怪ランキング大百科【鬼強い！鬼と巨大&地獄のヤバイもののけたちが大集合！】」を提示する。
 - (20) 同データベースが創作作品に利用される事例や考察については、峰守ひろかず「現代小説と「妖怪名彙」や、伊藤慎吾「妖怪地域おこしにおける怪異・妖怪伝承データベースの活用」などに詳しい（共に小松和彦、安井真奈美、南郷晃子編『妖怪文化研究の新時代』、せりか書房、二〇二二年に収録）